
見上げた空は、いつでも真っ青で

小来栖 千秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見上げた空は、いつでも真っ青で

【Nコード】

N8251X

【作者名】

小来栖 千秋

【あらすじ】

洋平と恵の間には、大切な一人息子がいた。ある日二人は、息子——航大が書き遺した日記を見つけ、それを読み返す。その日記には、確かに航大が生きていた日々が記されている。日記を読み返して、二人が初めて見る息子の一生の物語とは…。

日記『ナラタージュ』より 二〇〇七年 五月一二日

日記を書こうと思ったのは、僕の心境が変わったからだろうか。

まだ一六歳だが、それまでの僕は惰性のままに生きてきたと思う。中学を卒業して、高校に入学して、と周りの多くの人が歩む道と同じ道を歩いている、ただそれだけなのだ。

一日一日に意味を見いだせていない。

いや、意味を見いだせている人の方が少ないのかもしれない。

それでも僕は意味を見出さなければならぬのだと思う。

必要不可欠だとは思わないが、そうすることで僕の願いを叶えた
いんだ。

この――『叶えたい』という意識がいつの頃からか、僕の中では
つきりとしてきた。

そのように、心境が変わったのはやっぱり、

『自分の行く先』

が分かったからだろう。

今でも分からなければ、知らなければ良かったと思う時がある。

知らずに、その時を迎えられたらと何度も思った。
けれど教えてくれたのは、それを二人が望んでいなかったからなのだろう。

時々そう考えるようになった。

そのことについて僕はまだ何も感謝の気持ちを伝えられていない。
口下手な僕は面と向かって、はっきりと言えるかが分からないのだ。

昔からそうだ。

大切な想いを伝えることが、苦手だった。

それは恐らくこれから変わらないだろう。

後になって後悔するのではなく、僕はそのことを今後悔しているのかもしれない。矛盾だが、それに間違いはないような気がした。

これが、僕がこの日記を書き始めた理由の一つでもある。

その時伝えられなかった想いを、後から見てもらえるように――。

これを読んでいる人には、僕が小心者に映るだろう。

それはそれで構わない。事実そうなのだから。想いを伝えることを、こうして日記に頼っている時点で、そうだろう。

それでも伝わることを願って。

これは僕の――読み返す物語。

これからの日々が、良い日でありますように――。

二〇〇七年 五月一二日

二〇〇八年 二月二七日

洋平と恵には一人の息子ようへい めぐみがいた。

大切な――大切な一人息子がいた。あの日が訪れるまで。

見上げると冬の空が広がっている。

しかし身体を刺すような冷たさはあるのに、青く広がる空はどこか温かく感じる。

火葬炉の煙突から、緩やかに煙が空まで上がっていつている。

目を凝らしていれば、煙がどこまで上がっても見えるのではないかと思えるほどだ。

しかし眼に浮かぶ涙が、顔を上に向けることを拒ませる。

頬を流れる涙は拭うと、嫌気がさすほどに暖かく感じる。涙がこれほどに熱を持っているものだと、今気付いたかのようにだ。

洋平と恵の周囲には、喪服を着た多くの人がいる。みんな親戚たちだ。

葬式には学校のクラスメートや担任の先生も出席していたが、今はいいない。彼らが流してくれた涙を、二人はちゃんと覚えている。

それだけ愛された息子だったのだろう。そう考えると、洋平は子供に恵まれたと思えた。

息子のために涙を流してくれる人がいる、これほど恵まれたことはない。そう思えたのだ。

見上げた空は、どこまでも青い。
今の気持ちを汲み取るように、静かな雨を降らせてくれればいいのに。

全てを終わらせて家に着いたのは、二〇時を回ったころだった。
居心地良く見慣れた我が家に帰ってきてても、ここが本当に自分の家なのだろうかと疑問に思うほど、気分が晴れない。
今までの人生でこんな気持ちは初めてだ。

「あなた――、とりあえずご飯作るわね」

玄関でぼうっと立ち尽くしていると、二〇年以上も連れ添ってきた恵が小さく話しかけてきた。その声に意識が戻ってくる。

「あ、ああ……」

こんな気分でも人はお腹が空いてくるし、眠たくもなってくる。
自然と生活するために動こうとする身体を、恐ろしく感じる。
気丈に振舞おうとする意識さえも、結局はそういうことなのだ。
恵は久しぶりに履いただろう黒い革靴を脱ぐと、そのままリビングのほうへ歩いて行った。

その背中を見ていると、自分の妻はなんと気丈な人間なのだと洋

平は思ってしまう。上辺だけでも元気に振舞おうと頑張っていることに気付きながらも。

（そうしないと押し潰されるからか……）

恵のあとから洋平もゆつくりと靴を脱いで、我が家の廊下を歩く。廊下の途中には、二階へとつながる階段がある。さらに階段を上った先には、一人息子である航大こうだいの部屋がある。

時々、その部屋から聴こえてくる音楽が、今は聴こえてこない。そのままリビングに向かおうかとも思ったが、洋平は何となく二階への階段を上る。

あまり大きくない我が家ではあるが、二階には三つ部屋がある。一つは恵と洋平の寝室で、もう一つはほとんど物置として使われている。そして最後の一つが航大の部屋だ。

階段を一段ずつ上がる足がとても重たく感じる。それは疲労から来るものではなく、精神的なダメージから感じるものではるが、一段上がるたびに呼吸が乱れる。

それでも階段を上り切ると、だいぶ傷や汚れが目立ち古くなっている『航大の部屋』と書かれた札がぶら下がっている扉が見えた。

ゆつくりとその扉を開ける。

航大の部屋に入ると暗く見づらいが、何度も入ったやはり見慣れた風景だった。しかし、ここに大切な息子の姿はもうない。

「はぁ……」

自然とため息が出る。

この瞬間が訪れることを何日もかけて、覚悟してきた。してきた——つもりだった。

しかし実際に目の前にすると、その覚悟がもろく崩れる。ここま
で自分が弱い人間なのかと洋平は自分に落胆する。

それも無理ないことのはずなのに、自分を強く持とうと意識して
しまうために、自らの無力を呪いたくなるのだ。

航大がよく座っていた机には、今も様々なモノが散らばって置か
れている。まるで航大が今から宿題をするために座るのだ、と言わ
んばかりに教科書がいくつか積み上げられていた。

「うつ……」

不意に胸に込み上げてくる。

右手で覆った口からは、止めることができない嗚咽おえつが漏れる。立
っていられなくなり、その場に蹲うずくまる。そして、もう出しつくしたと
思った涙が、まだ溢れ出てくる。

うつすらとぼやける視界に入ってくるものは、何もかもが航大の
モノだ。航大が大事にしていた物ばかりだ。そう意識すると、さら
に涙が溢れてきた。

「あなた――」

その背中に声が掛けられる。

振り返ると恵が心配そうに立っていた。喪服を着替えたのだろう、
動きやすい服装の上にエプロンが掛けられている。

晩ご飯を作ろうとしていると洋平の姿が見えなかったので、探し
に来たのだろうか。

「恵……」

情けない所を見せてしまった。

強気に振舞おうとしている恵に対して、夫で男である洋平は泣い

てばかりだ。葬式でも我慢することが出来なった洋平は号泣していた。

その恥ずかしさや弱さから目を背けるように、視線を恵から前に戻す。

「いいのよ。そんなすぐにいつも通りにしなくても――。ゆっくり気持ちを落ち着かせていけば大丈夫よ」

そんな洋平を見て、恵はなるべく優しい声で言う。

その恵の優しさが洋平の身に沁みる。

この声に、言葉に、優しさに、今までどれだけ救われてきたことだろうか。洋平にとっては今回もそうだった。背中に伝わる優しさは間違えようのない最愛の妻のものだ。

そう実感することで、涙で滲^{にじ}んでいた視界も次第にはつきりとしてくる。

再び振り返ると、恵も涙を堪えていた。

「ありがとう……」

洋平は小さく感謝の言葉を述べる。

「ううん。あなたがどんなに航大を愛していたか私は知ってるわ。一人息子だったんだもの。あなたが悲しむのも仕方ないことよ」

「恵……」

洋平に掛けられる言葉は、とても温かい。自身も辛いはずなのに、恵は夫である洋平を慰めている。その事に、さらに洋平の目頭が熱くなる。

ありがとう以上の感謝の言葉が見つからない。
洋平は、これほどの辛いことも一人では乗り切れなくても、恵と
ならば乗り越えていけるような気がした。

「懐かしいな……」
「ええ」

二人は航大の部屋を見て、その全てを懐かしむ。
ほんの数日まで活気ある空間だったのが嘘のようで、虚しく光る
蛍光灯の明かりが主人のいない部屋を照らしている。

ここに座って徹夜をしてまで勉強をしていたのだらう勉強机や、
寝転がりながら漫画や雑誌を読んでいただらうくたびれたシーツの
ベッド、学校の教科書よりも漫画やCDが多く仕舞われている本棚、
ハンガーに無造作に洋服が掛けられているクローゼット。その全て
から、一人息子の匂いがしてくる。

今にも勢いよく部屋のドアを開けて、聞き慣れた『ただいま』の
声が聞こえてきそうなくらいだ。

「もう航大はいないんだよな……」
「ええ——」

口に出すことで、まぎれもない事実だと自分に言い聞かせるよう
に確認する。その声が震えていることに恵は気付く。

「あの子は……もういないわ……」

恐ろしいほどに小さく見える洋平の背中を抱きかかえるようにして、恵は辛い事実をはっきりとした言葉で告げる。

「……」

恵の温もりを直に感じて、不安定な気持ちが落ち着いてくる。それと同時に、静かに涙が頬を伝う。

蘇ってくる記憶はどれも大切な、本当に大切な息子の元気な姿ばかりだ。

始めてハイハイをした時も、一歳の誕生日に初めてホールケーキを恵と二人で作ったことも、親子でキャッチボールをしたことも、運動会を見に行ったことも、そのどれもが元気な航大だった。

（俺は……ちゃんと父親をやれたんだろうか……）

胸に湧き上がる疑問は、誰も答えてはくれない。

寄り添う恵の暖かさをいつまでも感じながら思い返す家族の思い出は、どれもきらきら輝いているものばかりで、航大が感じていた不安や悩みを聞いている思い出がなかなか見つからない。

「なあ……」

「なあに、あなた？」

返ってくる言葉は、どこまでも暖かい。

「航大は幸せだった……かな……」

「当たり前じゃない。あなたのような素敵な父親がいたのよ？ 不幸だったわけじゃないじゃない」

洋平の不安になっている気持ちを察した恵の言葉に、

「……俺だけじゃないだろ。恵も素敵な母親だったよ」

洋平も実直に返す。

その言葉が過去形であることに、洋平も恵も気付いている。気付いていながら訂正することはしない。それは、二人が航大ただ一人の親で在り続けることの意味の表れか。

大切な一人息子の部屋を二人は、自然と綺麗に掃除し始める。航大が生活していた部屋をそのまま埃まみれの部屋にしたくないからだ。

「懐かしいおもちゃね……」

恵がタンスを整理していると、子どもところに航大が気に入っていた戦隊モノの人形が出てきた。それを見て、恵は小さく呟く。

部屋を掃除していると見つける航大のモノは、どれもが懐かしく思えてしまう。ほんの数日前まで使っていた教科書やノートなどまでもだ。

そして航大が大事にしていたモノがたくさんあることに、今さらのように気が付いた。

そのまま航大の部屋を軽く片付けていると、そこで洋平はあるものに気が付く。

それは、

「お、おい！ このノート——」

「航大のだわ……」

洋平が手に取ったものは、よく見かける大学ノートだった。航大が学校の授業などで使っていたものだろう。

ノートの表紙には、あまり上手とは言えない字で『ナラタージュ』と書かれている。

「ナラタージュって……？」

「さ、さあ——？ 中には何が書かれてるの？」

意味が分からない洋平はノートを凝視したまま、震える手で表紙を捲る。

そこに書かれていたのは——。

二〇〇七年 六月一八日

目が覚める前のような、ふわふわとした感覚が全身を包む。

夢見心地という言葉の通り、気持ちいい感覚だ。

それまで見ていた夢から覚醒するように、航大は慌てて目が覚める。

ベッドの脇に置いてある——いつも自分を起こしてくれるはずの——時計を見ると、すでに八時を過ぎていた。

「や、やばっ!？」

時計が指している時刻を確認した航大は完璧に遅刻だと思い、さらに慌てるようにベッドから起き上がる。寝巻き姿のまま自分の部屋を出て、リビングまで降りる。

「母さん、飯出来てる!？」

大声を出しながら、急にリビングに入ってきた航大に、恵は驚いた表情を見せる。

「どうしたの、そんなに慌てて？」

「どうしたのって、完璧遅刻だよ!! また生活指導の中井に怒られるって——」

寝ぐせでぼさぼさな黒髪を揺らしながら、そのままの勢いでテーブルに座り、並べられている朝ご飯をかき込むようにして食べ始める。

恵は、朝はご飯という頑固なところがあるので、今日も並べられているのは朝から作り込まれている和食だ。ご飯が好きな航大には、朝からしっかり白米が食べられるというのはうれしい。

しかし、こういう時はすぐに食べ終えられるパンなどが好ましいのだが、いくら言っても恵は聞いてくれない。

「遅刻……？ 何言ってるの。今日は病院寄って行くんだから、寝坊しても関係ないわよ」

「あ、そっか——」

恵に言われて、思い出す。

今日は二週間に一回の病院に通院する日だった。航大は病気にかかっており、現在は通院をしている状況なのだ。

病院に行く日だということを思い出して、ご飯をかき込むように食べていた航大は一旦箸を置く。

「何時に病院行くの？」

「今日の予約は一〇時三〇分だから、一〇時前には家出るわよ。それまでに学校の準備しときなさいよ」

「わかった」

病院の予約の時間を聞いて、航大はさきほどまでの慌ただしさを落ち着かせて、ゆっくり朝ご飯を食べる。

「父さんは？」

テーブルに二人分の朝ご飯しか並べられていないことに気付いて、航大が尋ねる。

「もう会社に行ったわよ」

「ふうん」

航大が起きた時間は、学校も遅刻している時間だ。

学校よりも朝が早い会社に勤めている洋平はすでに家を出ていて当然なのだが、航大は少し残念そうにする。

航大と洋平の間に親子の会話がなくなってから、もう随分久しい。たまにはゆっくり話したいとも航大は思っているが、なかなか時間が合わずにいる。そういう生活を続けているうちに、航大は父親である洋平と一日に数回会話をすれば、良いほうという親子関係になっってしまったている。

「あんたも早く朝ご飯食べて、準備しなさいよ」

「わかってるって！　ってか、あと一時間もあるじゃん」

恵に催促される航大だが、時計の時間を見て軽く反論する。

「毎日毎日そう言って、時間ぎりぎりになってるでしょうが。今日くらい余裕をもって病院に行くのよ」

「あゝ、はいはい」

「ちょ……っ！？　なによ、その返事！？」

航大の嫌気がさしているような返事を聞いて恵はさらに叱ろうとするが、航大はさっさと朝ご飯を食べ終えて、自室に戻ろうとしていた。

「航大っ！」

「ごめんごめん——」

そう言って、航大はリビングの扉を閉めていく。

「あ、また——っ!!」

扉を閉める直前に、また恵の大きな声が響いてくるが、航大は無視していく。

恵は言葉使い一つにも敏感に反応して、怒ってくる。毎度毎度丁寧^{丁寧}に反省して相手にするのは骨が折れると航大は思っているのだ。それにはもちろん単純に怒られるのは嫌だという気持ちもあるが、何度も叱られて反省することはめんどくさいという気持ちもある。自分の部屋に戻った航大は、寝巻き姿からクローゼットに仕舞っている着慣れた制服に着替える。

「病院か……」

もう何度目かになるか分からない通院は、航大にとって少しめんどくさい。

しかし、身体に関わることなので疎かにすることもできない。毎日薬を飲むことは当然として、生活での変化などもちゃんと報告しないといけないのだ。

部屋の隅に置いている机には「毎日飲むように」と言われている薬が置かれている。毎日飲んでいても効果が表れているのかどうかははっきりと認識できない薬だが、航大はカプセル状の薬を飲むことを怠ったことはない。

その薬の隣に置いてあるノートに視線を移す。

「ナラタージュ……。いつか叶う時はくるのかな——」

ノートの表紙には、ナラタージュと小さく書かれている。それは航大の伝えたい想いが詰まった読み返される物語を綴^{つづ}っていく日記だ。表紙をめくると、何日か分の日記がすでに書かれている。そこに書かれている内容を軽く読んで、航大は自然と気恥ずか

しくなる。

そのまま日記をぺらぺらと読んでいると、

「航大ーっ！ 用意できてんのー？」

部屋の外から、恵の声が聞こえてくる。

気がつくと一〇時前だった。病院に行かなければならない時間である。

「ちょっと待って！」

制服には着替えたが、まだ鞆を用意してなかった。

机の上に無造作に置かれている教科書やらノートやらを薄っぺらい学生鞆に慌てて詰め込む。軽く忘れ物がないか確認をして、部屋を出る。

「遅いわよ」

「そんな急がなくてもいいじゃん」

階段を下りた先にある玄関で航大を待っていた恵は、すでにパンプスも履いて、今すぐにでも家を出れる状態だった。

「予約してるんだから、急がないといけないでしょ」

「ちょっとくらい遅れたって大丈夫だろ」

恵は航大を急かすが、それほど急ぐ気のない航大はさらにトイレに行こうとする。

「ちょ——、遅れちゃうわよ！」

航大の背中に恵が声をかけるが、航大は取り合わない。

「すぐ済ますから――」

時間に厳しい恵とは対照的に、航大は相当ルーズだ。時間に追われるように生活していても、それを駄目なことだとあまり思わないのだ。

その性格の違いから、恵のいら度が増していく。

「早くしなさいよーっ」

トイレの扉越しに恵の声が届いてくる。

何度も催促してくる恵に、うんざりとしながら航大はトイレから出る。その表情は気だるそうだ。

「まだ全然間に合うって。それに、何回も言わなくても分かっているよ」

「分かってないから、言ってるのよ。ほらっ！ 遅れたら先生の迷惑になるんだから、急ぐわよ！」

「わかったよ……」

どこまで正確に動きたがるんだろうか、と疑問に思いながら、航大は恵に急かされて家を出る。

玄関の扉を開けると、強い日差しが視界を一瞬奪う。

今日も雲一つないと言えるほどの快晴で、少しくらいは陰りを作ってくれてもいいのに、と思えるほどの強い日の光を太陽は放っている。

やはり見上げた空は遥か遠くまでも青い。

航大が通っている病院は、昨年新しくできた総合病院だ。

この地域には総合病院のようにベッド数が一〇〇を越えるような大きな病院がそれまでではなく、地域の小さな診療所などしかなかった。

そこに内科、外科、産婦人科、耳鼻科など多数の科がある総合病院がやっと開院したのだ。

白を基調とした室内には、航大ともう一人――白衣を纏^{まと}った医者が椅子に座っている。静かな雰囲気、緊張を漂わせてくる。それに負けないように航大は、椅子の上で両手をきつく握っている。

「うん。病気の進行はさほど変化がないね。良い状態だよ。最近は調子も良いんじゃないの？」

担当医の先生は今日の検査を終えて、航大にそう尋ねてくる。

「んー。そうかもしれないですけど、朝方はやっぱり気分が良くない時が多い……かな」

「なるほど――ね。寝苦しさとかはよく感じる？」

「あ、はい」

航大の説明を受けて、先生は少し考え込むように顎に手を当てる。そのまま、だいぶページ数が増えた航大のカルテを読み返す。

航大が通院をするようになってから、もう半年を越えている。こ

の担当医の先生とも診察の話だけでなく、学校での出来事など世間話をするほどの関係になっている。家族以外の大人に悩みなどを打ち明けられる人は、航大にとって貴重な存在だった。

「同じ症状が続くようだったら、そっちの検査もまた行うことにしよう。次に予約している患者さんもいて、今日はもう時間もないからね。航大も遅刻を結構しているみたいだし、授業には出ないと単位も危ないでしょ」

先生に名前で呼ばれることも、もう慣れている。

仕事で患者を呼び捨てで呼ぶのはどうなのだろうという意識も最初はあったが、担当している患者によって親しみやすさを出すために対応を変えているらしい。医者とはそういうものなのだろう、と詳しく知らない航大はそれで納得しているのだ。

「それほどひどくはないよ！ 最近ちゃんと授業にも出れてるんだし」

「そうなの？ お母さんは、また今日も寝坊したって慌てて起きてきたんですよ、って笑いながら言ってたよ」

皮肉も込めながら先生は言ってくる。

「な！？ 相変わらずひどい親ですよ……。息子のことを軽口で笑い話に使うなんて――」

「まあまあ。お母さんもそうは言ってるけど、航大のことを心から心配しているよ？」

「それを、息子にちゃんと示して欲しいんですけどね……」

嘆いていると診察室の扉が突然開いて、二人は驚く。扉を開けて入ってきたのは恵だった。

その顔を見た航大はそっぽを向くが先生は、

「おや、どうされました？」

「いえ、もう病院を出ないと四時間目に間に合わないと思って――。それより、何か話してたの？」

疑うような航大に視線を向ける恵だが、航大も負けずに返す。

「別に――。あんたの陰口を言っただけだよ」

「親に向かって、あんたとはなんて口の利き方よ!!」

航大の言葉の悪さに恵は叱りつけるが、そっぽを向いたままの航大は話を聞かない。

「それじゃ先生、また来るよ」

そう言って、恵よりも先に診察室を出て行った。

航大が診察室を出ていくのを見てから、恵は先生に向き直る。

「すみません、息子がまた失礼なことでも言っただけでしょう？」

「いえいえ、そんなことは言っただけですよ」

笑いながら返してくる先生の顔を見て安心をする恵に、先生は加えて気になることを言う。

「お母さん、航大君のことについて、少しお話があります。航大君を学校に送った後にでも、また病院に寄ることは出来ますか？」

「はぁ……。出来ますけど、息子がどうかしたのでしょうか？」

「今は航大君を学校に送ってあげてください。お話は少し時間をと

りますので――」

先生にそう言われて、恵は航大の身体に何かあったのではないかと不安を感じる。

しかし、航大を学校に送らなければならないことも事実なので、その不安を一旦胸の奥にしまう。

「わ、わかりました。では、また後でお伺いさせていただきます」

「ええ、お願いします」

先生に一礼をして、恵は診察室を出る。

診察室の外には恵が出てくるのを待っていた航大が、ベンチに座って携帯電話を開いていた。恵が出てきたことに気付いて、顔を恵の方へ向ける。

「何か言われたの？」

「え！？ う、ううん――」

「……？」

歯切れの悪い恵の返事に、航大は頭にはてなを浮かべる。

「さ、行きましょ！」

「あ、ああ……」

間違いなく何かがあったと思わせる恵の態度だが、航大は追求することはせずに恵の後を追う。それは航大には話せられない大人の事情ではないか、と思ったからだ。

再び車に乗って、航大が通う高校へと向かう。

その車内の雰囲気は、少し重たい。運転をしている恵はそれに参加しているわけでもなく、先生に言われたことについて、頭の中で

考えていた。また航大は、その恵の様子が急におかしくなった理由について考えていた。

車は通い慣れた通学路をひたすら走っている。

二〇〇七年 六月一八日 ?

恵が運転する車が学校の校門前に着いたのは、三時間目が始まって数分経った頃だった。

今学期に入ってから、すでにこの曜日の授業を三回休んでいるため、単位をしっかりと取るためにも今日は午後から登校するというわけにはいかなかったのだ。

「ありがとう、母さん」

「しっかり勉強してくるのよ！」

「わかってるよ——」

手を振ってくる恵に愛想なく返事を返すと、航大こうだいは自動車を見送るということもせずに校門をくぐる。

遅刻届を書くために生活指導教室に行かなければならないのが憂鬱ゆううつではあるが、今日は寝坊などの理由ではなく——しっかりとした理由があるから怒られることはないだろう。

校門をくぐって、いつものように下駄箱に向かうのではなく、事務室の前を通って生活指導室へ向かう。

生活指導室は事務室の玄関口から校舎に入った廊下の途中にあるのだ。

「こんにちは……」

事務室の窓口にいる事務員の女性に軽く会釈えしやくをする。

事務員の女性も挨拶を返してくるが、そのままそくさと生活指導室まで歩いていく。数メートル歩いただけで生活指導室の前に着

くが、すぐに扉を開けるといいう事が出来ない。

生活指導を担当している教師に航大は顔をはっきりと覚えられ、あまり良い印象を受けていないのだ。

そのため航大は自然と怖気おじけづく。

(……よし——っ!)

一呼吸置いて、自分を勇気づける。そして、小さく扉をノックする。

「失礼します——」

キィという不快な音を響かせながら、扉は開く。

「おお、どうした？」

室内には、やはり見慣れた仏頂面でたくましい髭を伸ばしている教師がいた。

「あ、あの……遅刻届を書きに来ました」

「おう、そうか。寝坊じゃないだろうな？」

「き、今日は違いますよ……」

鋭い眼光を向けてくる髭もじゃ教師に、鞆から出した診察証明書を渡す。

疑い深い視線を向けながら受け取る髭もじゃ先生だが、診察書は間違いなく本物だ。

「どうやら、本当に本物みたいだな——。よし、ハンコを押してやるから、担任に渡しておくように」

「はい」

今日はそれほど機嫌が悪くないな、と判断する。
もしかしたら朝の遅刻が一人もいなかったのかもしれない。そういう日は稀だろうから、髭もじゃ教師の機嫌が良いのだろう。

「失礼しました」

ラッキーな日だったなあ、と一人で思いながら生活指導室を出る。
遅刻扱いでも出席をしなければならなかったため、航大は三時間目が終わらないうちに自分のクラスを目指す。

生活指導室と教室棟を繋いでいる連絡通路を歩きながら、航大は病院を出る前の恵の態度を思い返す。

（先生に、病気のことで何か言われたんだろうか……）

真っ先に考えられることはそれだった。

しかし朝起きて体調が悪いということはあるが、病気の進行は薬を服用していることで抑えられている、はずだ。

それでなければ、航大がこうして学校に通うということも出来ないだろう。

起きた時の調子が悪いなど慢性的な体調不良はずっと続いているが、それも生活に支障をきたすほどではないのだ。

その他に、航大に見当がつくことはなかった。

（薬を変えるとか……は、本人にも言うだろうし、母さんに何を言っただ？）

いくら考えても分からない。

胸のもやもやとした気持ちが無くなりないまま、航大は自分のク

ラスである二年四組の教室の前まで来ていた。

「……」

教室の前まで来て、すぐに扉を開けることを身体が自然と拒む。授業中の教室に遅れて入るということが、なかなか恥ずかしいのだ。また遅刻して入ると、教室中の視線を集めることになるが、それが嫌でもあるのだ。

（ここでぐだぐだしてても仕方ない……か——）

そう意を決して、教室の扉を開ける。

「すいません、遅れました」

いきなり開いた扉に、やはり教室中の視線が向く。黒板に文字を書いていた教師が、教室の扉を開けて入ってきた航大に視線を移す。

「なんだ、航大か——。遅かったじゃないか？　また遅刻か？」

「は、はい……」

三時間目は、古典の授業だ。

古典を担当している教師は黒板に古文を書いていたのを中断して、出席名簿を取りだす。

「遅刻届です」

教壇に立っているその教師に、航大は生活指導室で受け取った遅刻届を渡して、自分の席へ向かう。

「おう。一応あとで担任の先生にも言っておくんだぞ」
「わかりました」

古典の教師に言われたことに返事をして、航大こうだいは自分の席に座る。教室中の視線が、未だちらほらと自分に向けられていることを、軽く意識しながら航大は学生鞆から教科書とノートを取り出して、黒板を見つめる。

「じゃあ、続きやるぞーっ！」

途中で中断した授業を再開する教師にばれないように、航大の隣の席に座っているクラスメートが話しかけてくる。

「何かあったのか？」

「ん？ ああ、また寝坊……だよ」

視線を黒板から移さずに、航大は答える。

「またって……。何回目だよ！？」

「さあ？ 数えてるわけないでしょ」

小声で驚いてくるクラスメートに、航大はむすつとした言葉で返す。

隣に座っているクラスメートはそれほど仲が良いとは言えない男子だ。

席が隣だから、という理由でしか喋らない間柄と言える。そのクラスメートにあれこれと言われるのは、航大は嫌なのだ。

「おい、おまえらちゃんと聞けよー」

そこに、教壇から航大とクラスメートを見ている教師の声が届く。

「遅刻もしておいて、授業も聞かないってんじゃないだろうな？」

「い、いえ……、すみません……」

おしゃべりをしていたことで、教師に怒られる。

隣に座っているクラスメートをちらっと一瞥^{いちべつ}して、航大は黒板に視線を戻す。授業でやっている内容は、航大が休んでいるうちに随分と進んでいるようだった。

この授業を休んでいた航大は授業の内容についていくことができずにいた。

三時間目が終わると、

「航大君、今日も学校来るの遅かったね」

「ほんとほんとっ。なんか寝坊多いよな、お前って」

自分の席に座っている航大の周りに、特に航大と仲のいい——裕也、誠、希——友達が集まってくる。

「ああー…、朝は弱いんだよね」

なんとか取り繕うように苦笑いで答える航大だが、話しかけてきた裕也も冗談で言っていることなので、特に気にはしていないようだ。

「そんなんで、テスト大丈夫なのか？」

「ん〜なんとかなると思うよ。困ったときは、ノートとか貸してくれるよね？」

心配してくる友達にも、航大は軽く返す。

航大が遅刻して登校するのは、クラスメートにはすでに周知のことだ。誰も本心から不思議がる人はいない。

それどころか、航大の友達はネタとして弄いじってくるほどだ。

航大自身も、その扱いに異論は唱えていない。こうして弄いじってくれることで友達になれるのならば、それでいいと思っているのだ。

「俺らのノート見ても航大の助けにはなんないでしょ。希の貸してもらえよ」

「そうそう」

裕也の言ったことに誠も同調する。航大に勉強を見てもらうことが多い二人は、自身の取っているノートが役に立つとは思っていない。

「ノート貸してくれる？」

「うん、私はいいよ。早い方がいいでしょ？　ちょっと待ってね、ノート取ってくるっ」

二つ返事で答えた希はノートを取りに、自分の席へ戻って行く。

「そういえば咲良さくらはどうしたの？」

航大は、学校では裕也、誠、希に咲良を加えた、この五人のメンバーでいることが多い。

裕也と誠、咲良とは一年の頃から同じクラスで、転校してきた希と同じクラスになってからすぐに仲良くなったのだ。

いつものメンバーが一人いないことに気付いて、航大は教室中を見渡しながら尋ねる。

「ああ、トイレかどっかじゃないか？」

そのことに気付いた裕也も教室を見渡すが、咲良の姿は見つからない。

「咲良は先生の準備室行ってくて言ってたよ。はい、航大君っ。休んでた時の内容のところに付箋貼つといたから」

そこに戻ってきた希が答える。

「そっか。借りてる漫画持ってきたんだけどな……。あ、ノートありがと。助かるよ」

「ううん、どういたしまして」

休んでいた航大に分かりやすいように、ノートには付箋がいくつか貼られている。

これがあれば、どこのページが航大が休んでいた日の内容かすぐに分かる。

「咲良はそのうち戻ってくるだろ。それより今日食堂行く？」

航大の前の席の椅子に腰かけている誠が、みんなに聞く。

「ん？ ああ、僕は今日弁当だから、どっちでもいいよ？」

「俺も」

「私もいいよ」

航大たちの返事を聞いて、

「じゃあ食堂で食おうぜっ！ 今日俺、弁当持ってきてなくてさ」
「咲良には聞かなくていいの？」

この場にはいない咲良はどうするのだろう、と疑問に思った航大が誠に聞き返す。

「咲良には三時間目の前に聞いて、何も用意してないって言ってたから、もう食堂に行こうって誘ってるよ」

「そうなの？」

このような何気ない会話も、航大にはとても貴重なものだ。

高校に入ってから出来た友達である裕也たちは、航大にとって宝物と言える。それは中学時代とは劇的に違う学校生活を送れているからだ。

中学時代の航大は、ほとんどの時間を一人で過ごしていた。それは友達がいなかったから、ではない。

航大が患っている病気のため、学校にまともに通う事が出来なかったという理由が大きい。いや、学校に通うことはできていた。しかし授業は休むことが多く、通信制のような個別授業という形までとられていたからだ。

決して友達がいなかったわけではない。

今でも連絡を取り合う中学校時代の友達もちゃんという。その数人が人並みではないというだけだ。

「おう。ちょうどいいやって思ってさ――」

「俺らが弁当あるからいいって言ったらどうするつもりだったんだよ」

後先を考えずに行動している誠に、裕也が感じていた疑問を聞く。

「そ、そりゃ、みんな説得して食堂に連れていくに決まってんだろ……」

苦しい言い訳を言う誠に、希が笑う。

「説得って――。そんなしなくても食堂についてってあげるに決まってるでしょ」

「え？　ほんとか？」

「当り前でしょ。そんな私たちひどくないよ」

驚いた表情をしている誠に、希は小さく笑顔を見せながら言う。

「そっか、サンキューな……」

「なに、照れてんだよ――！！」

「な……っ！？　照れてねえよ――っ」

「その反応が照れてるっていうんだよ」

裕也と誠の会話が、航大には微笑ましい。

友達というのは、このように会話を楽しめるのだと改めて実感した。

そうこうしていると予鈴のチャイムが鳴る。

「あ、んじゃ、四時間目の後は食堂で昼飯だかな！」
「分かってるよ」

確認する誠に、裕也が「何度も言わなくていいって」と返事を返して、それぞれが自分の席に戻って行く。

（結局戻ってこないな。咲良には後で返せばいいかな——）

そう航大は思い、机の中を漁って授業の用意を始める。

咲良が教室に戻ってきたのは、四時間目が始めるぎりぎり前だった。

四時間目の現代文の授業が始まっている。

航大の席は廊下側の真ん中辺りである。航大自身はこの位置の席に満足している。

教壇からは死角になりやすく隠れて内職することも出来て、質問を当てられることもあまりなかった。もっと言えば、窓側の席のほうが風景などを見ることが出来るのだが。

「それで、ええ。この一文には作者の心理ではなく、当時の時代背景が盛り込まれているわけだが、次の選択肢の内、どの時代背景が正しいか、誠！ 答えてみる」

「……！？ ええ、俺っすかぁ……？」

机上で腕組みをしながら突っ伏していた誠が当てられる。

「そうだ！ そんな体勢で授業受けてるからだ」

「ちえ……っ。えーと、答えはウっすか？」

「はあ……、お前は考えずに即答しただろ？　もっと設問と選択肢をしっかりと見て、答えろよ」

誠の解答に、現代文を担当している教師は重たいため息を吐く。

「考えたって、わかんないっすもん」

「そう最初から決めつけたら、駄目だろ。他の人はちゃんと考えて答えてるんだぞ？」

「ん……、じゃあ答えはウじゃなくて、アっすね！」

教師がため息を吐いたことで、選択肢のウは正解じゃないと判断した誠は、別の選択肢を答える。

「はあ……、お前ってやつは――。もういい。答えはエだ」

「ありゃ、間違えたっ」

誠のいい加減な解答に呆れた教師は、自ら設問の答えを言う。

「じゃあ、なぜ答えがエなのか説明していくぞー」

授業を行っている教師の話も、航大には半分までしか頭に入っていない。航大の頭の中は今朝のことではいっぱいだった。

（ここ最近、朝の体調が悪い……。やっぱり入院したほうがいいんだろうか……）

航大の担当医の先生からは、実は何度も入院を勧められていた。入院をすれば、病気の進行は今よりも遅らせることが出来るという。それは堅実な対応だろう。慢性的な体調不良もある航大には、安静にしていることが必要なのだ。

しかし、それでは航大こうだいの願い——想いは成就しない。そう思い直すすと、やはり入院にんえんをすることは憚はばられた。

「つまり——この登場人物の台詞の中に、留学している学生たちの国際状況が加味されているわけだ。学生の留学に関するそれぞれの国の状況について述べられている選択肢せんたくしエが答えになる。わかったか？」

淡々と授業は進められていく。

航大は朝、体調が悪いことをたしかに感じている。しかし学校に來てから、その体調の悪さも感じなくなっている。

それは授業を受けやすい体調であることに変わりはないが、それでも授業に身が入らないのだ。

「誠、わかったか？」

「ちょ……っ！？　なんで、俺だけ名指しなんすか？」

「さっき答えられなかったからに決まってるだろうが！」

「そんな——」

誠と教師のやり取りに教室中で笑いが起こるが、航大はやはり反応しない。頭の中で別の事を考えているからだ。その視線は黒板の一点を鋭く凝視している。

「名指しで呼ばれたくなきゃ、もっと集中して授業を受けるんだな」

誠に意地悪く言う教師の言葉に、また笑いが起こる。

それは希も例外ではなく教師の言葉に笑いながらも、自身よりも前の列に座っている航大が、ほとんど無表情でいることに気付く。

(……?)

みんなにつられるように笑っていた希の表情が一瞬で戻った。航大の表情があまりに不自然すぎるからだ。

クラスの全員とは言わないが、ほとんどの生徒が教師と教師に弄られる誠のやり取りに笑っている。それだけを見れば、良い雰囲気のクラスと言えるかもしれない。

しかし航大はその雰囲気の良いクラスの中で、一人だけ笑っていないかった。小馬鹿にしているような笑い方で済ましている生徒もいるが、航大の表情はそれとも程遠い。

(どうしたんだろ……)

航大の表情を見て、希は不思議に思う。二年になってから知り合った友達が、初めて見せる表情をしている。その事がすごく怖くも思えた。

そのように考えていると授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「……!! よーし、今日はここまでにするぞー」

チャイムが鳴ったのを聞いた教師が声を掛けるが、クラスの大半の生徒はチャイムが鳴ると、一斉に教科書やノートを仕舞いだす。チャイムが鳴ったその瞬間から戦争が始まるのだ。

「おーい、お前ら……。まだ号令してないぞー?」

教壇に立つ教師の声も誰にも届かない。弁当を持った野球部のグループが、すでにさっそうと教室から出て言っている。

「はぁ……」

教師のため息が聞こえてくる。その姿を航大は動かしていない視界の端で捉えている。

「どうかしたのか、航大？」

「……っ!？」

そのまま黒板を凝視し続けていた航大は、いきなり裕也に声を掛けられて驚く。

「いや、何でもないよ――」

笑顔を作って取り繕う。

「? とりあえず、俺らも急ごうぜ。もう食堂は人でいっぱいだろうよ」

そう。

戦争とは食堂の席取り合戦である。限られた席数に一〇〇人を超える生徒が押し寄せれば、すぐにテーブルは埋まって行く。

食堂を利用する生徒は、必然的にこの席取り合戦に参加せざるを得ない。

二〇〇七年 六月一八日 ?

食堂にはすでに多くの生徒が入り乱れていた。

「どっか席空いている？」

テーブル数がそれほど多くなく、一度に二〇〇人も利用したらすぐに満席になってしまう食堂は、毎日のように混雑している。

そのため食堂を利用している生徒は自然と限られ、その多くが二、三年生たちだ。食堂を利用している生徒たちは、それぞれの座るテーブルが決まっているかのように、何の躊躇もなくテーブルを陣取っている。

航大たちが、この食堂を初めて利用したのも二年生に進級してからだ。

「あっちの奥の方空いてるみたいよ」

食堂をぐるっと見渡していた裕也に、咲良が隅っこの空いているテーブルを指指す。

「もうあそこでいいか？」

「うん」

航大たちは、食堂の人の多さで乱雑している長テーブルよりも、隅のほうの小さなテーブルに座る。

「食券買ってこなくていいのか？」

同じようにテーブルに座った誠と咲良さくらを見て、裕也が尋ねる。四時間目が終わったばかりで、これから昼食時であるため、券売機にはかなりの人が並んでいる。

「今は人が多いからな。少し空いてから並ぶよ」

「あっそ。先食っていい？」

「ああ、俺らに気使わなくていいって」

すでにテーブルに持ってきていた弁当を広げているあたり気を使
うつもりなど微塵みじんもないのではないかと航大は思ってしまう。

いや、むしろ弁当を広げて返事をそのように誘導しているのかもしれない。

「列が長くても、並ぶべきじゃない？」

券売機の列が少なくなってから並ぶと言った誠に対して、咲良は
そう提案する。

「立ってるのやじゃん！ 食券買っても、できるの時間かかりそう
だし……」

「そう言っても、食べる時間なくなっちゃうじゃん」

子どものように駄々をこねる誠を、咲良が無理矢理引っ張ってい
く。航大は目の前に弁当を広げながら、その様子を笑いながら見て
いた。

「ちょ……っ！？ 俺は立ってるの嫌だって言っただろ？」

「私はお腹空いてんだから、早くご飯食べたいのよ！ 列が空くま
で待つつて馬鹿じゃん」

反論してくる誠の言葉を見無視して、咲良は強引に手を引っ張っている。

その二人を見て裕也は、

「あいつら、ほんと仲いいよな」

と卵焼きを頬張りながら、小さく呟く。

「仲いいのあれ？」

純粹に疑問に感じた希が疑わしそうに聞くが、

「あれでなんだかんだ喧嘩してないだろ？ 馬が合うっつか、相性が良いんだろ。あれで付きあってないのが不思議なくらいだよ」

「あゝ……、たしかに喧嘩してるのってか、言い合ってるの見たことないかも」

「だろ？ どっちにもその気がないんだろうけどさ——」

「あれ、そうなの？」

「ああ、どっちも好きな人はいないって言ってたし。今は俺たちと遊んでる方が楽しいって言ってたな」

「へえ、意外——っ」

裕也から聞いた二人の話に、希は声を大きくして驚く。

「ふーん」

裕也と希の会話を、航大は何とはなしに聞きながら恵が作ってくれた弁当を食べている。

それまで裕也の言うように、誠と咲良の間係を見たことは航大もなかった。

しかし言われてみれば、二人がよく親密そうにしている光景ばかりが思い出される。親密そう、と言うのは微笑ましい間係というよりも冗談を言い合ったり、お互いに突っつきあったりしている関係だ。

「まあ、お互いに意識しあってないのはいいかもしれないな」

「え、なんで？」

「今の――この間係が壊れないで済むから、だよ――」

意味深のように答える裕也は、自分の発言をそれほど気にせずに弁当に箸をつける。

「この間係……？」

対する希は裕也の言葉の真意が分からなくて、戸惑う。

「俺の話なんて、あんまり気にすんな。当たったためしもないからな。どうせ今回だってはずれるさ」

そう暢気^{のんき}になっている裕也だが、やはり希は気になって仕方がない。裕也の対面に座っている航大は今の会話を聞いていたのか、聞いていなかったのか、黙々と弁当を食べているので分からない。

（どういう意味なんだろう……？）

二年生になってから、この高校に転校してきた希は、一年生の頃の航大たちを知らない。その間に誠と咲良の二人には何かあったのかもしれない。

しかし、はぐらかされた裕也に聞くことは憚^{はばか}られた。

「遅いぞ、おまえら！」

誠と咲良がそれぞれ買った料理を持ってきたのは、それから二〇分ほど経ったあとだった。

「混んでたんだから、仕方ないだろ……っ！」

「ほんとほんと。みんな利用しすぎでしょ……」

食券を買うだけで疲れた、というような様子の二人は、テーブルにつくとすぐさま料理をかき込むようにして食べ始める。

「素直に弁当持ってくればいいじゃんか」

その様子を見ていた裕也がぼそつと呟く。

「その余裕があれば——ね。うちは朝そんなに余裕ないのよ。お母さんもお父さんも仕事に行くし」

注文したカレーを頬張るようにして食べている咲良が、裕也の言葉に反応するが、もごもごと喋っているのは女の子としてどうなんだろう、と航大は思ってしまう。

「冷食使えばすぐに作れそうなものだけどな、弁当なんて——」

「それでも朝は時間足らないのよ」

カレーにがついている咲良の食べるペースは、恐ろしいほどに速い。隣で定食を食べている誠よりも先に食べ終わりそうなほどだ。

弁当を持ってきていた航大たちは先に食べ終えているが、咲良と誠が食べ終わるのを待ちながら談笑をしている。

「午後の授業も眠たくなるだろうなあ」

「それは仕方ないでしょ。暖かい時期だし、お昼食べた後だし」

「でも、ちよつとうとうとしてたくらいで叩き起こされるんだぜ？

こっちは毎日必死に授業受けてるっていうのに――」

「授業って、そんなに必死になるもの？」

「なるって！ 眠気と必死に戦いながらノート取ってるんだぜ？

毎日が苦痛だよ」

そのように言っている裕也の言葉がおかしくて、希は笑ってしま
う。

「笑うなよ。こっちはこれでも真剣なんだから」

「ごめんごめん……。そんな真顔で言うからさ――」

我慢できないというように希は口元を手で覆って笑う。その反応を見て、裕也はムスツとした表情になるが、希の笑いはなかなか治まらない。

そんなにおかしかったのかな、と航大は二人の会話を聞いていて思った。航大には裕也の言っていることがすぐく分かるのだ。

退屈な授業ほど眠気と戦いながらノートを取るのには必死になるだろう。ましてや、授業を休むことが多い航大には尚更ノートを取
るという行為が大変なものなのだ。

「はあ、食った食った！」

裕也の隣に並んで座っている誠と咲良は、二人が会話をしているうちにそれぞれが注文してきた定食とカレーを食べ終えていた。

「おまえら食べるの早いな……」

「腹減ってたからな。それに昼休みもあと少ししか時間なかったからさ——」

誠に言われて、航大たちは五時間目が始まるまであと一〇分ほどしかないことに気付く。

「わ——っ！　ほんとじゃん。そろそろ教室戻ろうぜ」

この時間でも食堂には相変わらず多くの生徒がいる。そのため、まだ五時間目が始まるまでだいぶ時間があるのだろうと勘違いをしていたのだ。

「ちょっと待って——っ。急いで食ったから、腹痛い……」

「知らねえよ。てか、時間ないから俺ら、先に戻っとくからな」

「な……っ！？　ほんとに戻りやがった！」

薄情な奴らだな、という誠の文句が後ろから聞こえてくるが、裕也は取り合わず教室へとそそくさと帰って行く。慌てて誠が後を追いかけていき、先に戻っていった裕也に体当たりをくらわせようと突撃をするが、

「見え見えだよ、馬鹿っ」

と簡単にかわされる。

「待ってって言ったじゃん」

「時間がないって言ったろ。お前に付き合って授業に遅刻するとか嫌だし——」

裕也の言葉にみんなが笑って同意する。

「ひどくねそれ？」

「ひどくないって。みんなそう思ってたんだから」

このような冗談を言い合えるのも、こうして学校にちゃんと来れているからだと思大は思っていた。

今朝感じた身体の気だるさも何処かに行ったことに気付いて、今日は気分良く過ごすことができていることに航大は安心感を覚える。

（病院に行ったのが良かったのかな――）

理由は分からないが、今日は体調が良いことに変わりはない。午前中は今朝の病院でのことに思考を取られていたが、それも杞憂だったかのようだ。

保健室で休むということをしなくても、今日一日を乗り切れそうな気がした。

航大がそう思ったように、午後の授業も身体に違和感を感じることなく受けることができた。

「どうしたの、航大？　なんか気持ち悪いほど笑顔だよ？」

ちょうど航大の席の前を通りかかった咲良に不気味な表情をさ
る。

「いや、ちょっと良いことがあって——」

「良いこと……?」

何かあったのだろうか、と咲良は考えるが、普通に授業を受けて
ただけである。特別に何かがあったわけではない。

「あっそ、それは良かったね。けど、その顔は直した方がいいわよ
っ。不気味すぎるわ」

「え、僕そんなに変な顔してる?」

「自覚がないって——。あんたの表情見上げたげるわ」

ちやうど帰ろうと鞆を持っていた咲良は手鏡を出して、航大の顔
を映す。鏡に映った自分の顔を見て航大は、

「わっ!　ほんと気持ち悪い顔してるね」

と平然と答える。

「何その反応?　もっと驚きなさいよ……」

「や、十分驚いているよ。確かに不気味な顔してるなあって自分で
思う」

「自分が不気味な顔してるの分かって、その平然とした反応ってお
かしいでしょ。もっと身体を反らすくらい驚いてもいいのに——」

「そんなオーバリアクションしないよ——」

咲良の言葉にも、航大は笑顔を崩さずに返している。
変わらないその表情を見た咲良はため息を吐く。今の状態の航大

には、何を言っても仕方ないだろう。そう考えて、

咲良は未だに気持ち悪い笑顔になっている航大から離れる。

一方で、希の頭の中は午前の授業で航大の表情や食堂で聞いた誠と咲良の間係など様々なことが巡っていた。

（誠と咲良の話も気になるけど――）

希には、航大が見せた表情の方が強く頭の中に残っていた。

その時感じたことだが、航大が見せた表情は希が初めて見た表情だ。航大は裕也のように冷静沈着でも、誠のように常に元氣な姿を見せているわけでもないが、それでもあれほどマイナスの表情を見たのは初めてのことだった。

「……はあ……」

自然と重たいため息がこぼれる。

航大たちと知り合ってからまだ二カ月ちょっとである希には、それぞれに知らないことが多い。一年生の頃のことを聞くのは恥ずかしい気持ちもあるし、何より今さら感が希の中で強くある。その気持ちのせいで、希は知り合ってからずっと航大たちの昔話を聞いたことがない。

（やっぱり何か間係あるのかな……）

希の中に、航大たちの一年生の頃のことを知りたいという想いはある。しかし、聞くことができないのは希が抱いている気持ちもあるが、それだけではない――航大たちの一年前の間係も――理由もある気がしてならないのだ。

「どうかしたの、希？」

そこに、航大の席から離れてきた咲良が話しかけてくる。

「……っ！ 咲良……」

「深刻な顔してるわよ？ 何かあったの？」

「何かってほどじゃないんだけど……」

咲良に話すべきなのかどうか、希は迷う。

希の胸にあるもやもやは片方は咲良に関するもので、もう片方はすでに咲良たちは知っていることかもしれない。

「……？ 何かあるなら聞くよ？ 友達なんだもん」

希の表情から、希が抱えている悩みや不安が大きいと感じた咲良は、希の前の席の椅子に座り、真摯に尋ねてくる。

その態度に根負けした希は、咲良に午前中の授業で見た航大の様子を話す。

「……航大の表情？」

「う、うん——」

希の話聞いて、咲良は困惑した表情を見せる。

「いや、私も見たことない……かな——」

「そ、そうなの？」

「うん。あいつはこの地域の中学から来たやつじゃないから、この学校に入学した時も知り合いはほとんどいなかったらしくて、私たちと仲良くなるのも結構時間かったほうかな」

「……！！ そうだったんだ……」

咲良から聞く航大の話は、希には驚愕の内容だった。

航大は同地区の中学校から、この高校に進学したわけではなく、市を越えて受験してきたらしい。その理由については咲良たちも知らないと言っていたが、希の胸には何故か色濃く残る。

「うんそう。航大とよくしゃべるようになったのは二学期に入ってからだったかな。それまではほとんど一人でいたからね、あいつ――」

（一人で……）

その間、航大は何を感じていたのだろうか。

それは二年生からこの高校に通っている希にはわからない。市を越えてまで受験してきた航大には、何か理由があることは間違いないだろう。

「どうして、今のように仲良くなったの？」

咲良の話聞いて、希は不意に思った疑問を口にする。

「んー……、なんだったかなあ……。いつの間にか仲良くなった気がするけど、二学期だから体育祭とか文化祭の頃にな」

歯切れの悪い咲良の返事は、本当によく覚えていないといった感じだ。

その返事に嘘はないだろう。希が気になったのはそのことではなく、今の航大を見ていたら思うのだが、友達もおらずずっと一人で一学期を過ごしていたと信じられないのだ。

（それでも、仲良くなるきっかけは何かあったはず――）

現に、今も航大の席の周囲には裕也と誠がいて、楽しくおしゃべりをしている。航大のその顔には笑顔も見て取れるほどだ。

「まあ、それほど気にすることでもないんじゃない？　今はあしで楽しそうにやってんだからさ。私たちがとやかく詮索していいものなのかも分かんないしね。それに、何かあるなら私たちから詮索するよりも、航大から話してくれるのを待つってのも手だと思うよ？　話したくないのに、あれこれ聞かれるのも嫌だろうしね」

そう言って、咲良は話題を変える。

「う、うん。そうだけど……」

それでも希には気になることだった。

「希は気にしすぎなんじゃない？　気分転換にトイレ行こうよっ」

希の反応を見て、咲良は希の気分を変えてあげようとそう誘う。

「でさ、いっつも部活部活ばっかってのも味気ないじゃん？」

航大の席の周囲には、いつものように仲良しの裕也と誠がいる。

「そりゃ夏休みなんだし、部活やるのは普通じゃね？」

「そうかもしれないけどさ――。せっかくの夏休みなんだし、どっ

か遊びに行きたいじゃん!!」

「でも、夏休みってまだ一カ月も先だよ？」

鼻息荒く話している誠に、航大はそつと教えてあげる。

「どっか遠くに遊びにいくなら、早いうちに計画しなきゃ駄目だろ？
だから、こうして二人に話してるんだよ」

「どっか遠くって――。何、旅行に行こうって話？」

「それもいいし、日帰りでもいいし」

誠は身ぶりを大きくして、興奮したように話している。それほど誠は旅行に行きたいのだろう。その計画の話を何時しようか何時しようか、とずっと考えていたのかもしれない。

「旅行――ねえ……」

「なんだ、乗り気じゃないのか!? 去年は航大と仲良くなる前で行けなかったし、今年は希も俺らの仲間に入ってきて、もっとお互いに仲良くなろうって話じゃん!」

「いや、行きたくないってわけじゃないさ。ただ、どこ行くかって計画するのだけど、お金の問題だしなあ――。バイトしてるわけじゃないから、そんな高いところは行けないぞ? 第一俺らだけにじやなくて、咲良や希も混ぜて打ち明けりゃ良かったじゃんか」

「まずは二人に言いたかったんだよ。あの二人――特に、咲良は行きたくないって言うかもしれないねえだろ？」

「そうか……？」

確証のない誠の言葉に、裕也は首をかしげる。それについては航大も同意見で、

「行きたくないって言うかな――? 友達なんだし、行こうって案

外即決するかもしれないって思うけど」

咲良の性格を考えれば、行きたくない、と言うことはまずないだろう。むしろ、そういうことは自ら計画しそうなほどだ。

誠も「それも、そうか」と妙に納得したように何度も頷いている。

「だから僕たちにだけ話すんじゃないくて、またみんなで話し合うほうがいいよ」

旅行の提案をもう一度し直すことを勧めて、航大は席を立ち上がる。

「どこ行くんだ？」

「ちよつとトイレ――」

背中に声を掛けてくる誠に軽く返して、航大は教室から出てトイレへ向かう。

トイレへと向かう足取りは軽く、自然と頬が緩む。一日をやり切った、という達成感が航大の胸の内を占めているのだ。

このような日は航大にとっては珍しい日だ。喜ばないわけがない。通りすぎる生徒たちが、奇異の視線を向けてくるが、そのことから航大は気付かない。

（帰ったら、母さんに自慢してやろ――っ）

そう思えることも、珍しいことだった。

その軽い足取りのまま、廊下の角を曲がった所で、

「――っ!？」

不意に航大の胸を強烈な鈍痛が襲う。

感じた痛みを鎮めるように、航大は右手を胸に当てる。しかし痛みは引いてくれない。さらに目眩までし始め、呼吸が上手くできない。

「はぁ……はぁ……」

目眩は止まらない。

身体中を強烈な寒気が襲い立っていられなくなり、その場に蹲る。
そして、乱れた呼吸を整えるように口を右手で覆う。

そこに、

「航大君——っ!？」

トイレから出てきた希が声をかけてくる。

「航大君、大丈夫？」

見られた、と心配して慌てて駆け寄ってくる希に驚く航大。

「う、うん。ちょっと目眩がただけだから……」

「そっか。急に倒れそうになったからびっくりしたよ」

（見られていない？）

確実に見られたと思ったが、希は気付いていないようだ。そのことに航大はほっとする。学校では注意を払っているつもりだったが、まだ足りないようだった。

「ありがとう。でも大丈夫だよ、よくあることだから——」

これ以上心配されないように、不思議がられないように言う。

「そ、そう？」

まだ心配している様子の希だが、航大にそう言われたことでとりあえず一安心した、といった感じだった。

「うん。心配してくれてありがとう」

なんとか笑顔を作って答える。そして、航大はそのままトイレへと入って行った。

「……」

「あれ、希？　どうしたの――？」

希が何も出来ずにその場につっ立っていると、トイレから出てきた咲良が不思議そうに尋ねてくる。

咲良の声にも、希は反応しない。その視線は先ほど見た航大の蹲る姿に囚われていた。

二〇〇七年 六月一八日 ？

「はあはあ……」

虚しく蛍光灯が付いているトイレで、航大は洗面台の鏡を覗きこんでいる。

鏡越しに映るその顔は血の気がないといえるほどに青白い。

（薬……薬を飲まなきゃ――）

制服のポケットを漁り、見慣れた銀色の紙状の容器に入っているカプセルの薬を取り出す。本来なら、昼食を取った後に飲まなければならぬ薬だ。

航大はその薬を一つ取りだし、水も飲まずに一気に飲み込む。

「――っ……、はあ……はあ……」

薬を服用したことからか、少しは胸の鈍痛や心臓の動悸が治まった気がする。そして思考力が回復してくる。

（間違いなく希に見られた……）

希が気付いているかは分からないが、見られたことは事実だ。

その場では航大は見られていないと判断したが、あの角度から見えていないことはないだろう。

そのことに気付いて、航大は自分の不注意を呪う。

（どうしよう……）

急に襲ってきた胸の痛みよりも、希に見られたという事実の方に航大は恐れる。それは航大が一番恐れていたことだ。

「はぁ……はぁ……」

次第に安定してくる動悸とは裏腹に、回復していく思考はだんだんと混乱していく。

（どうしよう――）

同じ単語ばかりが浮かび、まともな判断ができない。

とりあえず呼吸が整うまではトイレにしようと、航大は汚いと分かっているながらも、トイレの壁に背を預けるようにして床に腰を落とす。

そのトイレの洗面台には血が残っていた。

「でさぁ、明日の体育がほんと嫌なのよね」

希は咲良さくらとトイレから教室へと帰ろうとしている。すでに授業は全て終わり、掃除も終わって、そろそろ生徒が部活に行ったり下校を始めている時間だろう。

「この時期にマラソンとかおかしいでしょ」

隣を歩いている咲良の話は止まらない。

どうやら明日の体育が憂鬱ゆううつで嫌なようだ。

たしかにマラソンが好きな人はそれほどいないだろうし、冬にもやるだろうマラソンを六月にやる意味もわからないという咲良の話も分からなくはない。

しかし、そこは教師の決めたことであり、生徒である希たちがどうこうできるものでもない。

そう考えている希は別にマラソンをやることに異論はないし、咲良ほど嫌だとも思っていない。

「まあ、この時期にやるのは驚いたけど——」

「でしょ？ マラソンなんて体力テストの時にやる持久走だけでいいってのに」

「マラソンと持久走はちよつと違うんじゃない？」

咲良との会話を合わせている希だが、その頭の中では先ほど見た航大の様子が鮮明に残っている。

（航大君、何か隠してるんじゃない——）

あの光景を見た後に希は真っ先にそう考えた。

その場では蹲うずくまっている航大の心配をしたが、彼は大丈夫だと短く言っていた。

しかし、希の目からでも大丈夫には見えないのは明らかだった。うつすらと見えた彼の手には赤い血のようなものが付いていたように思え、そう思うと希は不意に恐怖を感じたほどだ。

（今日遅れて来たことも間係してるのかな——）

自然と希はそう考えてしまう。

航大は学校に遅刻してくることがたまにある。その理由を、彼はいつも寝坊と答えていた。

裕也たちは分からないが、希は航大のその答えを疑問に思ったことはない。朝が弱い、という彼の弁は本当にその通りだと思うからだ。

「希、ちゃんと聞いてるの〜?」

不意に、咲良の声が脳に響いてくる。

「……っ!? き、聞いてるよ」

「ほんと——?」

ぺらぺらと話をしていた咲良は疑わしそうな目を希に向ける。

「ほんとだって」

「まあいいけど——。午後から希なんか心ここにあらずつて感じたよね」

「そ、そうかな——……」

咲良の一言に、希はドキッとする。

それは彼女の言葉が凶星だからだ。午前中の授業で見せた航大の表情や、先ほど見た航大の様子が希の頭に濃い残像をはっきりと残している。

希はその残像に振り回されるように、航大のことを考えていた。

「うん。何かあったの? 航大の表情がどうのこうの言っていたり——、まさか航大と何かあったの!？」

「え……っ!?」

「だって急に航大の話しだすんだもん。何かあったって思うじゃない! 告白されたとか——?」

「ぶ……っ!」

希は盛大に吹きだす。

「そ、そんなわけないじゃん——!!」

慌てたように手をパタパタと振りながら希は答える。その様子をじとーっとした目で見ている咲良は、

「ふーん。でも、ノート貸したりとか仲いいよね？」

「そ、それは友達として——だよ。それに、航大君が私を好きだとも思えないし……」

必死になって否定している姿を見て、ますます咲良は怪しいと判断する。

「そうかな。希は見た目も中身もいいしね、男がほっとくようには見えないんだよね……。航大ってそういう典型的なのに弱そうだし——」

「典型的って——」

希を評価する咲良の言葉に、希は敏感に反応してしまう。

「典型的じゃないか——っ。希はもっと可愛いもんね」

「そ、そういうことじゃなくて——」

「まあまあ——。航大もわかんないよ？ 本当に希に好意持ってるかもしれないし、じゃないと真っ先に声かけにいけないでしょ」

「……っ！ そうかもしれないけど——」

不意に転校してきたばかりの頃を思い出す。
はるか遠くの街から転校してきた希はこれが人生で最初の転校で

あり、転校した学校での第一歩なども分からずに困惑している節があった。

転校初日こそはちやほやされたりしたが、それも次第に落ち着いてくると、クラスというのはやはりそれぞれのグループに戻っていく。その時に困っていた希に手を差し伸べたのが航大こうだいなのだ。

「あのグループに女子は私だけだったから、私はうれしかったけどね」

そう笑顔を見せてくる咲良。

それは彼女の本音だろう。男勝りな部分のある咲良だが、それでも居心地が悪いと思うこともあったのかもしれない。

「だから航大には感謝してるよ。でも、あの航大が一番に声かけにいったんだからねえ。気がないわけじゃないんじゃない？」

『あの』というのは希の知らない一年生の頃の航大を指しているのだろう。

希に声を掛けたのも、その頃のことの間係しているのだろうか。希にはそれは分からないが、その時の航大がいたからこそ、今はこうして咲良とも仲良く話をしていられる。

それに関しては咲良と同じで希も航大に感謝している。

この感謝の気持ちから航大が気になるという意識に繋がっていることに、今の希は気付いていない。

「そう……なのかな……」

「そうだって！ 私たちもほんとに驚いたくらいなんだから」

一年前と今の航大の差を知らない希は咲良たちが驚いたというその度合いが分からないが、あの表情を見てしまった以上、航大には

知らない一面がいくつもあるような気がしてならない。

航大がどのような意図で希に声を掛けたのか——それが分かれば、航大の見せた表情の意味も隠しているだろうあらゆる面も見えてくるかもしれない。

そう考えた希は、航大の心配から脱線してしまった咲良との会話も話して良かったと思えた。

（あとは、航大君に直に聞くこと——しかないかな）

次に取りべき行動を自分の中で確認した希は、それまでの心配や不安をひとまず一掃させる。抱いていたそれらの気持ちも航大の隠している一面を見てからだ、と改めて判断できたのだ。

静かな空気が建物を包みこんでいるように、病院の外はゆったりとしている。

病院に設けられている中庭では、親族が入院しているのだろう——散歩を楽しんでいる子ども連れの親の姿が見える。

その光景はどこまでも微笑ましいもので、その周囲の時間は目に見えて取れるほどにゆっくりと進んでいる。無邪気な子どもの笑顔が絶えないように、神様が時間をゆっくりと進めているかのようだ。それでも昼下りの病院内には人が多い。待合室には、診察を待つ様々な人の顔が見え、病院の受付も忙しそうにしている。

その病院に恵はまた来ていた。

「それで、話というのは何なのでしょう？」

恵の対面には、航大の担当医になっている先生が座っている。

「わざわざ、また足を運んでいただいて申し訳ないです。話というのはもちろん航大君のことに関することなのですが――」

先生は一旦話を区切って、口を真一文字にする。

その様子が恵には、話すべきなのかどうなのか迷っているようにも見えた。

「実は――航大君は、入院を望んでいないのです」
「……っ!？」

切りだした先生の言葉に恵は驚く。

「入院を望んでいない？」

「ええ。入院をすれば、完治するとまではいかなくても病気の進行を遅らせることはできます。私どもとしても、以前に一度入院することをそれとなく勧めたのですが……、航大君は入院だけは絶対にしないと拒んでしまつて……。なぜ、航大君が入院を望まないのか。お母さんに思い当たる節はありませんか？」

「はあ……」

先生の話を聞いた恵は、航大の様子を思い返すように視線を動かす。

航大の担当医である先生は、航大に入院することを勧めたと言っている。容体の悪化を防ぐためには、入院することが一番なのだ。しかし航大は、それを拒んでいる。ということは航大の意思に、先生が気付いていないのだ。

淡い期待を抱いている先生に対して恵は、

「……私には思い当たる節はありません」

「そうですか……」

恵の返事を聞いて、先生は落胆したような表情になる。

「けど、航大に何か考え——というか想いがあるのでしょうか。私からも入院することを勧めます。その時に航大の考えも聞けたら、聞いてきます」

「それは有難いです。ぜひ、お願いします」

「はい。お話というのは——？」

「ええ、航大君の入院に関することだけです。わざわざ時間を取らせてしまって申し訳ありません」

「いえ、私は大丈夫です。それでは——」

先生にお辞儀をし、恵は先生の病室を出る。その恵の表情は浮かない。

航大が入院を拒んでいるというのは、初めて聞いたことだった。恐らく家族で話し合う前に、航大自身に意思の確認の意味も込めてそれとなく話をしてみたのだろう。しかし、やはり恵にも航大が入院を拒む理由が分からない。

（入院を拒む理由——）

思えば、航大は体調が悪くてもなるべく学校に行くようにしている。

今朝だって、調子はよくなかったはずだ。それでも昼前から登校している。恵は、それが留年しないためや卒業するためだと思っていたが、何か別の理由があるのではないだろうか。

その理由が入院を拒んでいることに繋がるのでは、と考えれば考えるほどそう思えてくる。

航大の学校での様子は担任の教師から逐一報告が入っている。そ

れを航大に言ったことはないが、授業なども保健室で休むことが多々あるということは聞いている。

今朝も体調が悪そうにしていたので、授業をいくつか休んでいるかもしれない、と恵は考えていた。

保健室で休まなければならぬほど体調が悪いのであれば、学校自体を休んでも良いと恵も洋平も考えている。

そのことは航大にはきちんと伝えているが、頑なに学校に行っているのが現状だ。

（学校に行かなければならない理由でもあるのかしら……）

恵はそのような結論に至る。

その理由が航大が入院を拒む理由に繋がっていると考えた恵は、俯いていた視線を前へと戻す。その目には強い意志が宿っていた。

放課後。

急に胸の痛みを覚えた航大^{こうだい}は、動悸が治まるまで生徒が帰った教室でじっとしていた。

「……」

じっと机の角に腰を落としている航大は、その視線をグラウンドの方へ向けている。航大が見つめているグラウンドでは、野球部が活動している活気のある声が響いている。

その胸の内は、先ほどのことで渦巻いている。

（明日希に会うのが怖いな……）

何を言われるのか分からない、という恐怖が航大の不安を助長させる。

希は、見た航大の様子を裕也たちに話しているかもしれない。もしそうであれば、これまで隠してきたことが無意味になってしまう。それだけは避けたいと航大は強く思っている。

「ここで考えててもどうにもならないか――」

いつまでも教室にじっとしていても解決するわけではないと気付いた航大は、自分の机の横にかけられているかばんを取って、帰ろうと下駄箱へ向かう。

教室を出て歩く航大の足取りは、ほんの一時間前のそれとは大きく違う。

この一日を何事もなく過ごしていたことに大きな喜びを感じていた航大は、過去のものだ。

食堂で弁当を食べていた時に、裕也たちの前でもちゃんと菓を飲んでいれば良かったと後悔している今の航大は、あまりにも元気がない表情をしている。

明日からはなるようにしかならないと頭で考えていても、心の後悔が消えないといった苦悩の表情にも見える。

「はあ……」

その気持ちからか、深いため息が零れる。

今の状態を裕也たちに見られたら、さらに心配されるのだろうか、と航大は自然と自虐してしまう。面倒見が特に良い希は、駆け寄ってくるかもしれない。

それはそれで嬉しい状況かもしれないが、そう考えてしまう自分が航大は嫌になるほど自分本位な人間に思えた。

そのような考えが頭を巡りながら、下駄箱で靴に履き替えようと

していると、

「ぼうっとしてどうしたんだ、航大？」

と声が掛けられる。

航大に声を掛けてきたのは、航大の中学からの友達である知樹ともぎだった。鞆を持っている所を見ると、知樹も今から帰るとこみたいだ。

「知樹……」

「何かあったのか——？」

知樹は、航大の様子を見て、彼に何かあったのかと疑問に思う。

彼はこの高校では、航大の一番長い知り合いと言える。同じ中学から、この高校に進学したのは航大と彼だけなのだ。

「や、何でもない——」

その知樹は心配がらせないように、航大は努めて平静に返す。そして自分も帰ろうと下駄箱から校門の方へ歩き始める。それでも知樹には見透かされてしまう。

「また——倒れそうになったのか？」

その一言に航大の身体がビクつき、足が止まる。

「どうやら、そうみたいだな。あれほど無理はしないほうがいいって言ってきたのにな。お前のクラスの奴らが言ってたけど、今日も遅刻してきたらしいな。病院に行ってたんだろ？　なら無理して学校に来る必要はないじゃないか」

止まった航大の足を見て、知樹は確信する。知樹は、その航大を心配するように声を掛けるが、「大丈夫だよ」と返事が返ってくるだけだった。

大丈夫、と短く返した航大は知樹のほうを振り返ることもしないで、校門へと歩いていく。知樹はその後ろ姿を見ることが出来なかった。

（どうみても、大丈夫じゃないだろ——。あの時だって……）

その航大の様子を見て、知樹は不意に昔のことを思い出す。それは知樹には分からないが、航大にとって思い出したくもない辛い過去の記憶だ。その記憶が今も航大と知樹を繋いでいる。

「……はあ……」

小さくため息を吐いて、知樹も航大が去った後に続いて校門へ向かう。

知樹に心配された航大は、自然と足を速めながら家へと向かっていった。

心配されたことはうれしく感じる。知樹とは中学の二年生で同じクラスになり、出席番号が近かったということもあり、仲良くなつた航大にとって一番の友達だ。

その友達が自分のことを心配してくれているのはうれしく感じて当たり前だろう。しかし航大は、その知樹に対して冷たくあしらってしまった。知樹はそう感じていなくても、航大には自分に対しての罪悪感が残っていた。

（知樹は、全部知ってて心配してくれているのに……）

その罪悪感が、航大の身体を駆け巡っているのだ。

「弱いな……やっぱり」

自然と零れた言葉は、誰に届くでもなく風に乗って掻き消されていく。

全てを話せば、裕也たちも知樹と同じ反応を見せてくれるかもしれない。そう期待している自分がいることは航大も認識している。

しかし、そうじゃないかもしれない、と恐怖に怯えている自分がいることも航大は気付いていた。

その相反する気持ち航大の決意を鈍らせ、現状を維持することが一番だという結論に至らせた。航大自身もそのことに不満はない。今の生活も十分楽しく思っているからだ。

（それでも、みんなが知樹みたいに想ってくれたら――）

淡い期待は抱いては消し、抱いては消しを胸の内で繰り返してきた。そのズキンと痛む心の反応までもが愛おしいと思えるほどにだ。それでも裕也が言っていたことを自分に置き換えて、この間係は今のままが一番良いのだと思うてしまう。その陰で裕也たちがどのように感じているのかにも気付かずに。

「あと一年……あと一年だけはどうかこのままで――」

次に発した言葉は消えることもなく、緩やかに吹く風がどこまでも運んでくれるような、そんな気がした。

日記『ナラタージュ』より 二〇〇七年 六月一八日

今日も、朝は寝坊をした。

最近になって、その回数が増えてきている。これが病気のせいなのか、それとも僕の甘さなのか、はっきりと言いきれない所が恐いんだ。飛び起きた後には、母さんに思いっきりびっくりされた。笑われなかっただけマシなのだろうか。

病院に寄ってから学校に行ったのだけれど、またしてもクラスの友達から話のネタとしていじられた。

これも何回目だろうか。嫌ではないが、飽きてきている僕がいることがひどく嫌になる。

その学校の休憩時間に、希に血を吐いている所を見られそうになっってしまった。

いや、見られたのかもしれない。その場はなんとかあったが、書いている今も安心できていない。やはり、最初から話しておくべきだったのだろうか。

僕の決心が揺らぎそうだ……。

久しぶりに知樹と話をした。

話と言えるほどのなのかは分からないが、相変わらず良いやつだ。中学の時と変わらずに心配してくてるのはうれしい。その知樹に冷たくしてしまった僕がひどく劣悪に思えて仕方がない。

それでも僕を心配してくれる人が少なからずいることが、これほどうれしいと思ったことはないかもしれない。
いつか全てを話す時も、みんなは心配してくれるだろうか。

明日も良い日で、ありますように――。

二〇〇七年 六月

一八日

二〇〇八年 二月二十八日

どれほど眠っても心の傷はやはりそのまま、起きてもまた同じ夢の中にいるかのようで、夜になり眠ることが恐くなる。

この日も洋平はそのような寝つけない夜を過ごしていた。

「……」

何度もベッドの中で寝返りを打ち、その度に航大こうだいのことを考える。それで心の中で何かが解決するわけでもないが、そうしていなければ眠ることへの恐怖がなくならないような気がしてならないのだ。

（眠れない……）

その理由は分かっている。

航大の部屋で、航大が書き記していた日記を見つけてしまったからだ。息子が亡くなったという悲しすぎる事実もだが、それ以上に日記に書き残すことで気持ちの整理をつけていた航大の心情に気が付かなかったという親としての情けなさが洋平の心を占めているのだ。その気持ちが眠ることへの恐怖を助長させている。

「……はぁ……」

タイマーをセットしているエアコンは洋平が眠りに付くまでの間、部屋を暖めておこうと鈍い音を発しながら暖かい風を運んでいる。

静寂に満ちている部屋には、そのエアコンの動いている音しか響かない。厳しい寒さを耐える上では有難いエアコンだが、今はその音が嫌になるほどうつとうしく思う。

（航大はいつもこんな夜を過ごしてたんだろうか）

寝つけない時は、異常なほどに様々な考えが頭を巡るものだ。

洋平も、自然と今の自分を病気の進行に恐怖していただろう航大と照らし合わせていた。それは洋平には一生分からないものだ。

それゆえに、気になってしまうのだ。

最後に見た航大の表情が、不意に思い返される。これで死ぬのだと悟ったような航大の表情は洋平にとってあまりにも辛い息子の顔だった。

思い出したくもない、けれど忘れてはいけないその息子の表情が、洋平の眠れない夜を長引かせていく。

洋平が目を覚めたのは、それから数時間が経った頃だった。寒さに負けじと小鳥がさえずる声が聞こえてくる。

「ん……」

漏れる吐息は脳が活動を始めようとする意思表示かのように、次第に洋平の瞼がまぶた開いていく。その顔に、カーテンの隙間から差し込む冬の日差しが当たる。それは天然の目覚まし時計だ。

「……朝……」

いつの間に眠ってしまったのか分からない洋平は、目が覚めると

朝になっていたことに驚く。

（もうこんな時間か……）

寝ぼけ眼のままベッドの脇に置かれているデジタル時計を見ると、七時前を指していた。その洋平の隣には、いつも恵が眠っているベッドがある。しかし、恵の姿はすでにそこになかった。どうやら恵はすでに起きているようだ。

隣に恵がいないことを確認して、洋平もベッドから起き上がる。

「……」

その表情はどこか虚ろなままだ。

息子を亡くしたという事実をいまだ上手く飲み込めていない表情にも見え、現実逃避をしたいという意思の表れにも見える。

しかし、それでも洋平は生きていかなければならない。いつもと同じように起き、朝ご飯を食べ、支度をし、会社に行き、仕事をし、家に帰ってまた明日に備える。その繰り返しをこれからも行わなければならない。

（いつから、こんなに自分は弱くなったのだろう……）

不意に洋平はそう思う。

その答えをすぐに見いだせないまま、時間は洋平を先へと進ませる。このままぼうっとしているわけにもいかない洋平はおもむろに立ち上がり、夫婦の寝室を後にする。

洋平が寝室から出ると、その前には航大こうだいの部屋がある。昨夜は心の安定を求めるように、無意識に入って行った息子の部屋だ。

「……………」

部屋の扉には、やはり見慣れた札がぶら下がっている。札に書かれている文字は、随分と薄れていて、『の』という文字が読みにくいほどだ。

そこに、洋平は時間の流れを強く感じてしまう。

感じた流れはどうやっても取り戻せるものではなく、懐かしむためだけに存在する思い出のように、洋平の記憶の中に留まるだけだ。その記憶すら曖昧になっていくことに憤りを覚えるほどに、洋平は自らの無力さを呪いたくなる。

「あなた――、そろそろ起きてよー！」

そこに、恵めぐみの声が届いてくる。

「……っ！」

自暴自棄に陥りそうになっていた洋平の意識が戻る。

「あ、ああ、今行くよ――っ」

恵の声に急かされるように、洋平は階段を駆け降りる。

リビングに行くと、併設されているキッチンで恵が洗い物をしていた。あまりにも起きるのが襲い場合は起こしにくる恵が一階から声をかけたのは洗い物をしていたからだろう。

リビングの窓のカーテンは全て開けられており、厳しい冬の朝空でも窓からは暖かそうな日差しが部屋に入り込む。

エアコンから届く暖風よりも、その天然の暖かさのほうが効果があるような気になりながら、日差しが届いている方の席に腰掛ける。テーブルにはすでに恵が作った朝ご飯が並べられていた。

「おはよう」

まだキッチンに立っている恵に、洋平は朝の挨拶を掛ける。その声に、リビングに背を向けている恵が振り返る。

「うん、おはよう——」

返ってくる返事は、いつものように活気ある声だ。その表情や声色に昨日のことが見えない。いや、見せないでいるのだろう。昨夜家に帰ってきたときも、恵はその強さを洋平に見せていた。自分の妻の強さに改めて、洋平は驚く。これではどっちが男らしいのか分からない。

「いただきます——」

そんなことを考えながら、朝ご飯を食べ始める。

白米が好きだった航大のために朝もパンではなくご飯という決まりなのだ。航大がこのテーブルに座ることはないが、それでもそのことを忘れないようになるのか、それとも習慣としてご飯を炊くことがもう染みついているのだろうか。

少し硬めに炊いてあるご飯は歯ごたえがあっておいしい。ここの辺りも水っぽいお米が嫌いだった航大の好き嫌いがしっかりと出ている。

そのことに気付くと、それまで感じていた恵の強さも儚いものに見える。

「……」

涙が出そうになるのをこらえながら、無言で箸をすすめる。

「どうかしたの――？」

そんな様子の洋平に、恵が不思議そうに尋ねる。その声で我に返るように恵を見やり、自然と涙が出た。

「ど、どうしたの！？」

洋平の顔を見て、恵は慌てる。キッチンから急いでハンカチを差し出すが、洋平は片手で「なんでもない」と制する。

「あなた……」

昨夜と同じように、恵は優しい声を洋平へかける。

それは妻として夫を支える決意によるものだ。母親として息子を支えることが出来ていたのか、恵にははっきりとした自信はない。昨夜洋平に言った言葉に嘘偽りはないつもりだが、その自信がはっきりとついてこないのだ。

「こんなんじゃ、これからが思いやられるな……」

小さな苦笑とともに、洋平は自分のふがいなさをぽつりと呟く。

「いきなり全部を割り切って、元の生活に戻るなんてできませんよ。少しずつでいいから、また元気な姿を周りの人に見せてあげましょ」

洋平にかけられる言葉は丁寧で、実直なものばかりだ。

その全てが恵の洋平を慰めよう、元気づけさせようという気持ちからくるものだろう。その恵の決意が見えるようで、洋平は自分の妻はとても頼りになると改めて思う。先ほどまで想っていた恵の強さが儚いものではないのだとはっきりと思えるほどに。

「そうだな……」

止まっていた箸を再び動かして、朝ご飯を食べる。

恵が作る料理はいつもおいしい。そのことを肌で感じながら、一つだけ空いているテーブルの椅子をちらっと見て、味噌汁を飲み干す。

（心の傷は時間が洗い流してくれる……か——）

今の心境ではとてもそのように思えないが、それでも生きるために生活はして行かなければならない。一人息子を亡くしたとはいえ、洋平にはまだ守らなければならぬものがあまりにも多くある。同じ後悔を二度としないために、今をしっかりと生きようと洋平は決意する。

「ごちそうさま——っ」

とりあえず今は会社に行き仕事をしなければ、と洋平は朝ご飯を食べ終わると自室へと戻って行く。

食べ終わった朝ご飯の食器は、テーブルの一片だけに固められて置かれていた。

リビングから自室へと戻る間の廊下に、航大の部屋へ通じる二階への階段がある。昨日はおもむろに上った階段だが、今朝はそんな時間はない。

（行ってくるよ、航大）

航大の部屋にそのように念を飛ばして、スーツに着替えるために洋平は自分の部屋へと入って行く。

洋平が去ったりリビングで、恵は洗い物の続きをしていた。

（まだもうちょっとかかりそうね――）

手は泡だらけのまままで動かしているが、頭の中では別のことを考えている。

今朝も涙を少なからず流していた洋平は、心の中でまだ区切りがついていないのだろうか。そこまでは恵には分からないが、息子を亡くしたというショックはまだ当分洋平の中で残りそうだった。

（それも仕方ないこと……か）

もちろん恵も航大を失ったことには深い悲しみを抱いた。恵にも洋平にもたった一人のわが子だったのだから、その悲しみの深さは想像を絶するほどだ。

「ふう……」

洗い物を終えた恵は一息つこうとテレビを点ける。

点けたテレビからは朝の情報番組が流れている。そのテレビから聞こえてくる話題は明るいものから暗いものまで様々だ。それらのニュースや話題を見て、恵は世界がいつものように回っていることを改めて自覚する。

恵がソファに座ってテレビから流れてくる話題にじっと耳を傾けていると、スーツに着替えた洋平がリビングに戻ってくる。

「そろそろ行くよ」

「……っ！ 準備できたの？」

洋平の声に、ぼうつとテレビを見ていた恵は意識を戻す。

「ああ。次の電車には乗らないと間に合わないからな」

「ちょっと待って——」

洋平が出勤しようとしているのを見て、見送ろうとする恵だが、

「いや、そのままでもいいよ。ずっと気を張ってただろ？ 今日は一
日ゆっくりしてくれ。帰ったら俺が家事もするよ」

落ち込んでいる洋平に変わって昨夜から気を張り詰めていた恵を
気遣って、洋平はそう言葉をかける。

「でも——」

「俺はもう大丈夫だよ。完全に吹っ切れるにはもう少し時間がかか
るかもしれないけど、いつまでもうじうじしてらんないからな」

そう言って、はにかんだ笑顔を見せる。その表情は昨夜見せてい
たものとははるかに違っていた。

「あなた……」

「それじゃ行ってくる」

小さく言葉を残して、リビングの扉を開ける。

「気をつけてね。いってらっしゃい」

振り返ると、いつもと変わらない暖かい表情で送り出してくれる
恵の姿がある。その表情を見ただけで、洋平の胸が落ち着く。

それだけで頑張ろうと思えるのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8251x/>

見上げた空は、いつでも真っ青で

2011年11月18日06時51分発行